

機関番号：42671

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720234

研究課題名（和文）アラスカ先住民ユピックによるコミュニティ発展に資する文化資源利用の研究

研究課題名（英文）A study of the use of cultural resources for community devolvement among Yupi' k/Cup' ik in southwestern Alaska.

研究代表者

久保田 亮（KUBOTA RYO）

立教女学院短期大学・英語科・専任講師

研究者番号：80466515

研究成果の概要（和文）：本研究では、アラスカ州南西部のチュピック／ユピック村落での伝統的建物「カジキ」の復元プロジェクトおよびその活用が村落コミュニティの維持・発展に果たす役割について調査を行った。建物復元に至る歴史を追うとともに、建物の利用状況についての民族誌的資料を収集した。それによって同プロジェクトが教育における自律性を確保したいという同村住民の意思を反映したものであったことがわかった。また、再興された「カジキ」の位置づけは「社会生活の中心」というかつての位置づけとは大きく異なることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study explores contemporary roles of *Qasgiq*, which is the traditional building in Yup'ik / Cup'ik society, in a native village in southwestern Alaska. Based on the analysis of materials collected during the field study in the village, it becomes clear that the reconstruction of *Qasgiq* signifies people's wish to secure their autonomy in educating their children. Also the ethnographic data indicates that the contemporary *Qasgiq* is different from the one in the traditional setting in terms of its social function and its cultural meanings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：（分科）文化人類学・（細目）文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、文化資源、先住民、コミュニティ、アラスカ

1. 研究開始当初の背景

アメリカ合衆国によるアラスカ併合によって、アラスカ先住民社会はアメリカ主流社会の周縁に組み込まれ、その文化的、社会的、経済的自律性を著しく減じることとなった。しかし1960年代以後、州内での自然資源開発の開始とそれに呼応してはじまった先住民による土地請求運動を通して、先住民の位

置づけを是正する試みが主流社会と先住民社会の相互交渉を通して行われるようになった。その結果、先住民の伝統的生業である狩猟・漁撈・採集活動の継続的实施を可能とする法的措置、公的学校教育への村落住民参加を目指した制度改革などの動きが生じた。

こうした先住民の諸権利を保障しようとする動きには、中心一周縁間の非対称な権力

関係の再生産／再強化が内在している。主流社会由来の文化伝統や信念の固有性とその影響力に対する無自覚さか、政治権力を持たない先住民が常に譲歩せざるを得ない事態を引き起こしているのである。

しかし上記の指摘は、先住民が構造的不平等の現実をただ甘受していることを意味するものではない。彼らはこうした社会図式に取り込まれつつも、それと折り合いをつけながら自身の「生き方」を自律的に方向付けようとする存在でもある。本研究で採り上げる伝統的建物「カジキ」の再興もこうした動きの一つといえる。

2. 研究の目的

研究代表者は、アラスカ州南西部のチュピック／ユピック村落での伝統的建物「カジキ」の復元プロジェクトおよびその活用についての調査を行った。それによって新たに再興された「カジキ」が村落コミュニティの維持・発展に果たす役割について考察することが本研究の目的である。

カジキは、チュピック／ユピック村落社会において重要な役割を担っていた。そこは成人男性が寝食をともにする場所だけでなく、村を挙げて各種伝統儀礼を執り行う場、伝統的知識を次世代に伝達する場、他村からの客をもてなす場、火風呂を浴びる場という複合的な用途を有する空間だった。カジキはユピックの「社会生活の中心」に存在していたのである。しかしキリスト教宣教師による伝統儀礼の抑圧、定住村への移住を契機とした居住形態の核家族化、公的学校教育の普及といった生活環境の変化のなかで、カジキは村落生活から姿を消してしまった、と言われている。

このカジキを復元するプロジェクトが、アラスカ州南西部の1村落に暮らすチュピック／ユピック自身によりはじまり、2007年に一応の完成をみた。本研究は、現代によるみえたカジキを単なる歴史遺物の復元としてではなく、チュピック／ユピック主導のコミュニティ開発、すなわち「豊か」で文化的な生活を可能とするコミュニティ構築の試みとして捉え、その建築物が村落に存在する意味を明らかにしていく。

本研究では、中心的な課題を以下の4つに定めた。(1) 過去のカジキ利用に関する民族誌的資料を収集する、(2) 再興プロジェクト実施に至る背景についての資料を収集する、(3) プロジェクトの実施状況についての資料を収集する、(4) カジキ利用の実態について参与観察を実施する。これらの課題を通して、現代村落社会における再興されたカジキの位置づけについて検討し、伝統文化の再興がコミュニティの維持・発展にいかにか寄与しているのかを検討する。

3. 研究の方法

本研究は現地調査と文献調査を併用した。

現地調査は、アラスカ州南西部の一先住民村落（以下A村とする）で実施した。公的資料によると同村の人口はおよそ900人であり、住民の95%以上が先住民である。またアラスカ州南西部を故地とする先住民の大部分がユピックと自称するのに対し、同村出身者はチュピックと自称する。同地での調査は2009年3月および2010年9月の2回実施した。現地調査では、同村住民への聞き取り調査ならびに参与観察を行った。

上記の現地調査によって収集した資料に加えて、過去に研究代表者が同村で実施した調査で得た資料、ならびに2011年3月に同村落を訪問した際に収集することができた資料も本研究の課題を考察するための材料として用いた。

文献調査では、伝統期におけるカジキ利用に関する民族誌学的研究を渉猟した。またインターネットを通して、アラスカ州内で発行されている新聞の記事、公文書、チュピック／ユピック文化・社会に関する学術論文の収集も行った。

4. 研究成果

(1) カジキ消滅に至る歴史的経緯

移動生活を伝統的に営んできたユピック／チュピックの生活様式は、アメリカ主流社会のエージェント（交易商人、宣教師）との相互作用を契機に定住的な生活様式へと徐々に移行した。

定住村への移住前後にカジキに生じた質的な変化として、伝統儀礼を執り行う場としての役割がそがれたことが挙げられる。宣教師による伝統儀礼への抑圧ならびにチュピック村落への教会建設は、カジキの「宗教的中心」という位置づけを大きく揺るがしたのである。以降チュピックの宗教生活は教会を中心とするものへと変化した。

また公的学校教育の本格化にともない、村子弟が学校で過ごす時間が相対的に増加するようになった。それまで村子弟、とりわけ男子の教育は古老たちをはじめとする成人男性によりカジキで行われていた。しかし公的学校教育は、「学び舎」としてのカジキの社会的機能を縮小化する結果をもたらしたのである。

ただしこうした変化がカジキ利用の衰退をただちにもたらした訳ではない。A村へのチュピックの移住は1950年だったが、それ以降も人びとはカジキを利用していたことが聞き取り調査から明らかだ。居住パターンの変化によりすでに村の成人男性が寝食をともにする場としての位置づけはなかったものの、社交場、火風呂場^{*1}、そして

娯楽としてのエスキモー・ダンスの練習および披露の場として人びとはカジキを定期的に利用していた。カジキを利用するのは主に村の古老たちだった。現在のA村住民の中には、幼少時にエスキモー・ダンスを練習したり、ダンスを見学したりするためにカジキへと足を運んだ記憶がある者がいた。現在ではエスキモー・ダンスは学校教育課程のなかに組み込まれており、A村子弟は学校でダンスを学ぶが、当時は古老の指導を受けながら、カジキでダンスを学んでいたのである。

カジキが同村落から姿を消したのは1970年から1980年にかけてのことだった。その背景として第一に挙げられるのが、その主たる利用者であり、かつ移住以来村の指導的立場にあった古老たちが亡くなったことだという。

またA村に蒸し風呂^{*2}が普及したこともカジキの消失と関わっていた。蒸し風呂は、1973年の学校校舎新築事業をきっかけにA村に普及した。建設作業のためA村に滞在したユコン川流域出身のユピックたちは、蒸し風呂をA村に建てて利用していた。それをみたA村住民が蒸し風呂を個々の家のそばに建て始めた。それにともない、火風呂を浴びる目的でカジキを利用する人びとが徐々に減少した訳である。

さらにエスキモー・ダンスの練習場としてカジキに代わり、村公民館が利用されるようになったのもこの時期に当たる。なおA村がアラスカ州の行政システムに組み込まれたのは、1967年のことである。

すなわち主流社会のエージェントないし制度の影響を通して、カジキはその社会的機能を徐々に削がれていったことがわかる。伝統期にカジキが有していた社会的機能は、教会、学校、蒸し風呂、村公民館などに分散して担われることとなり、その結果カジキは村落生活から姿を消したのである。

実際、A村住民はカジキの倒壊を防ぐために補修を実施したものの、補修作業が度重なったために最終的にその補修を断念したという住人の語りもある。これは、カジキが伝統的に担った社会的役割が新たな施設に代替されていたためにカジキ存続の必然性が生じなかった事を示している。

(2) 再興プロジェクト立案の経緯

カジキ再興プロジェクトの中心人物はA村学校教員のJ氏である。彼は「文化遺産プログラム」のコーディネーターを長年努めている。また彼はA村でのエスキモー・ダンスの中心的人物でもあり、ダンス演目の創作活動や彼の担当するダンス授業受講生とともにアラスカ州都市部で開催される大規模なダンス・フェスティバルに参加することもしばしばである。

A村は1980年以来、公的学校教育の枠組みの中で伝統文化教育を展開してきた。その中心人物は、彼の母方祖父であるF氏だった。J氏は祖父と活動をともにし、A村でのユピック伝統文化教育を牽引してきた。本研究の焦点であるカジキ再興プロジェクトも、こうした伝統文化教育の一翼をなす活動といえる。

しかしJ氏の語りからは、彼が公的学校教育の枠組みの中でのユピック文化教育活動の限界を感じていることが随所に伺えるのである。現在の教育は「ガサック流儀なものが多すぎるのだ」と彼は述べる。ガサックとは「白人」を意味する言葉だが、アメリカ合衆国の政治経済制度、主流社会において支配的な価値観などを指す場合にもユピック/ユピックが用いる言葉でもある。

A村における文化教育は必ずしも伝統文化の保存のみを主眼としたものではない。むしろJ氏が重視するのは、伝統文化教育を通して「道徳」や「倫理」を次世代に伝えることであり、その涵養を通して変化する社会文化状況に柔軟に対応できる真の人間を育成することにある。しかし公的教育の枠組みの中で、こうした理想を実現する事が困難であることを彼は感じている。

つまりJ氏は公的学校教育とは異なる文化教育のためだけの場を模索していたのである。間もなく定年を迎えるにあたり、J氏は自身の教育哲学に基づき、文化教育を実施できる場をカジキに見いだそうとした、と言う事ができよう。

(3) プロジェクトの実施状況

プロジェクトの立案者であるJ氏によると、カジキ復元に携わったのはJ氏と村学校で清掃員として勤務するL氏、そして再建当時高校生だった若者2人の合計4人ということだった。J氏は再建したカジキを紹介するウェブサイト^{*3}を作成しており、そのページ内にも彼ら4人が再建者として紹介されている。



写真：復元されたカジキ
(2010年9月 研究代表者撮影)

しかし実際にはより多くの住民がカジキ復元に参加している。当時村学校に通ってい

た生徒たちも授業内活動として、このプロジェクトに関わっている。ゆえに上記4人を中心に、A村学校生徒たちによって、カジキが再興されたと述べるのが適切だろう。

カジキはA村の北の端にある教員用住宅のさらに奥にある、村学校が管理する野球用グラウンドの真ん中に建築された。周囲にA村住民が暮らす家がないため、人通りはほとんどなく、村の中心部からも離れている。入り口から奥の壁までの長さが約18メートル、横幅が約10メートルある。流木や草束といったA村一帯で収集した天然の材料に加え、防水シートなど市販の商品も利用している。枠組みの組み立ては、可能な限り釘を利用しない伝統的なやり方でおこなっている。ただ組み立てには人力のみならず、重機も利用している。屋内にはベンチが設置してある他、ストーブが設置してある。それに加えて二度目の調査時点では天井に蛍光灯も設置してあった。

復元されたカジキは伝統期におけるカジキの構造的特徴を忠実に再現したものではない^{※4}。伝統的なカジキ構造との差異としては、半地下構造を有していないこと、炉を有していない、天井部の窓を開閉する事ができない、などを挙げることができる。これらの点は復元されたカジキが火風呂場としての利用を意図していないことを示している。

カジキの建設は CVRF (Coastal Village Region Fund) から50,000ドルの助成を受けている。同団体はアラスカ州南西部沿岸地域にある20村落が加盟する先住民団体であり、就業機会の提供、先住民コミュニティの社会経済開発や人材育成のための各種プログラムを実施している。なおJ氏は CVRF の理事を務めていたことがある。

(4) カジキ利用の現在

A村住民からの聞き取り調査の結果、2011年3月現在まで、A村住民のカジキ利用の頻度は極めて少ないことがわかった。研究代表者が知る限り、チュピック文化学習を目的とする学校行事「文化遺産週間」における古老の語りを聴くイベント、村の年中行事に参加するためにA村を訪問した人びととの「ダンスの練習」、そして研究代表者が訪問した折にA村住民が催してくれた「ダンス・パフォーマンス」のみだった。なお研究代表者が参与観察した「ダンス・パフォーマンス」に参加したA村住民は23人だった。

これに加えてA村住民であれば誰でも参加できる「ダンス練習」が週1回開催されることになってはいるものの、予定通りに実施されないこともしばしばあるという。

以上の点から現時点では、再興されたカジキがA村住民の多くが利用する空間となっているとは言えない。

ただし今後の活用法として、学校授業における古老の語りを教室内ではなく、カジキ内で実施するという案などが検討されていることを付記しておく。



写真：カジキでのダンスの様子
(2011年3月 研究代表者撮影)

(5) カジキとコミュニティ開発の関係

現段階において、A村に再興されたカジキは特筆すべき社会的機能を有していると言うことは出来ない。

その大きな原因として、現代村落社会における社会的機能の分散化を挙げることが出来る。歴史的過去において、カジキはさまざまな社会的機能が折り重なる空間として存在していたからこそ社会生活の中心として位置づけられていた。しかしその機能のすべてを再びカジキに集約することは現時点では不可能である。また設備の点からも、収容人数の点からも、利便性の点からも、村内の別の施設を利用する判断が妥当である場合が多い。実際、村外からの多く招待客が集うA村の年中行事では、小規模の練習こそカジキで行われたものの、本番のパフォーマンスはより多くの人員を収容できる学校体育館で行われた。

しかしA村のカジキは再興されたばかりであり、現時点でカジキの存在意義を問うのは早計であろう。またカジキの存在が村子弟のチュピックとしての成長にいかにか作用するのかを検討することも現時点では難しい。

むしろ重要なのは、A村住民が学校、村公民館などの既存の場以外の、新たな活動の場を手に入れたことである。カジキをめぐるA村住人の今後の活動を引き続き注視しなければならない。

注)

- ※1 カジキ床面にある炉で火を燃やして、室内を高温にする。
- ※2 小屋内に据え付けた薪ストーブの上で石を焼き、その上から水をかけて水蒸気を発生させることで室内を高温にする。
- ※3 ウェブサイト (<http://pingayaq.com/>)
- ※4 そのため厳密に言えば、この建物は「カジキ」ではない。A村住民のなかには「あ

れはカジキではなく、草床の家 (sod house) だ」と言う者もいる。しかし本研究では、プロジェクト立案者である J 氏にならい、カジキと表記する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

(1) 久保田亮、「歌の帰郷—民族誌的資料の「返還」と「活用」に向けた取り組みについて」『北海道立北方民族博物館研究紀要』、20: 11-24、査読無、2011 年。

(2) 久保田亮、「法概念「サブシステム」の成立—先住民権利保障へのドミナント文化の影響」『東北人類学論壇』、8:22-53、査読有、2009 年。

[学会発表] (計 1 件)

(1) 久保田亮、「バックステージからみる「先住民の集い」—アラスカ先住民・チュピックの社会関係に関する考察」シンポジウム『連帯(つながり)の人類学—社会関係の持続と変容』、2008 年 11 月 29 日、東北大学。

[図書] (計 2 件)

(1) 窪田幸子・スチュアートヘンリ・高倉浩樹・内堀基光・上橋奈緒子・岸上伸啓・大村敬一・久保田亮・栗本英世・丸山淳子・速水洋子・楊海英・野林厚志・宮岡真央子・野本正博、『「先住民」とは誰か』、世界思想社、2009 年、Pp.179-200。

(2) 岸上伸啓・青柳清孝・阿部珠理・伊藤敦規・岡庭義行・久保田亮・齋藤玲子・立川陽仁・谷本和子・広瀬健一郎、『みんなく実践人類学シリーズ 4 北アメリカ先住民の社会経済開発』、明石書店、2008 年、Pp.161-192。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 亮 (KUBOTA RYO)

立教女学院短期大学・英語科・専任講師

研究者番号：80466515

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし